

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(平成 26 年度第 2 回研究会)

日時:平成 26 年 12 月 7 日(日曜日)午後 2 時より午後 6 時

場所:東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

1. 高島淳 (AA 研)

「アンコール王権とシヴァ教」

本報告は、カンボジアのアンコール王朝について、その王権を権威づけるための即位灌頂儀礼がシヴァ教による要素を重要な構成要素としていた事を論じる事を中心とするものである。

はじめに、従来のアンコール王朝研究の大部分において、物質的基盤についての理解が不十分であった事を解説した。一つは、寺院等の建築の基本資材であるラテライト・ブロックが、現地(たとえばアンコール・ワットの環濠)の数メートルの地下の地層から直接に粘土のようなものとして容易に切り出して採掘され、モルタルなしに積み上げるだけで完全に密着して、化学的変化によって完全に固い石となる、ということである。運搬についても加工についても、必要な労働力は想定されていたものの数十分の一に過ぎないであろう。必要労働力から過大に見積もられていた人口についてもずっと少なかったであろうから、かつて想定された畝越し灌漑などありえないことで、特に降水量の豊かな西部地域を農業基盤として想定すると天水と小規模溜め池で充分であったと考えられる。

続いてアンコール王朝の王位相続が定まった規則を持たず、常に実力による継承争いが一般的であったという説を否定するために、女系相続(基本は叔父から姉妹の息子[甥]へ)について検討を行なった。アンコール王朝の高官や聖職階層において女系相続が行なわれていたことは碑文から明らかである。女系相続の伝統と並行して行なわれる初潮儀礼における南インドとカンボジアの類似性も興味深い現れである。王の場合については男系相続を導入しようとした試みは明確に見て取れるが、それが完全に成功することなく最終的に女系相続の伝統に回帰した、あるいは女系相続の継承主体である女性の婿として王位を継承するという形での解決に至ったという形で解釈できる継承の例が、二都並立状態の事例などの重要な例で見られることを検証した。

このような不安定な王位継承の状況において、特にいくつかの都市国家の基盤の上に王国を確立しようとしたジャヤヴァルマン 2 世は、即位灌頂の儀礼を導入したと考えられる。それが有名な「デーヴァラージャ」である。従来「神王」と誤って訳されて来たが、この言葉の用いられている **Sdok Kak Thom** 碑文での用法は儀礼を指しており、素直に神々の王インドラを意味し、「インドラの大灌頂」として知られる即位灌頂の儀礼を指す事は確実である。しかし、そこにシヴァ教の入信式であるディークシャー儀礼を導入し、王の死後の

シヴァとの合一を保証する要素を付け加えたところが新しいものである。

この儀礼の根拠となった教典はシヴァ教のアーガマの中の最古のものとして知られている *Niśvāsa-tattva-saṃhitā*、特にその中の *Guhya-sūtra* であって、それに基づく「世界の道(*bhuvana-adhvan*)」によるディークシャーが行なわれた事が碑文から読み取れる。

「デーヴァラージャ」に対応するクメール語の表現である *Kaṃraten Jagat Ta Rāja* は、「世界の主(シヴァ)すなわち(真の)王」と理解でき、シヴァこそが国土の真の王であって、国王はその代理として統治しているという観念の表現であり、公衆の前での壮麗な即位祭礼と相まって、それなりに王の権威付けに役立ったものと思われる。

最後に補論として、*Sdok Kak Thom* 碑文のホロスコープについて、ビージャを伴わない古い計算法(インド本土では西紀 1000 年ころ以前に行なわれていた)に合致するもので、1053 年 2 月 8 日午前 2 時ころにリングアの建立儀礼を行なっていることから、古い時代におけるマハーシヴァラートリの祭日のあり方についても面白いデータを提供していると考えられる事を示した。

2. 近藤信彰 (AA 研)

「南アジアにおけるペルシア語文化と在地社会」

本報告では、まず、報告者のこれまでの研究に基づいて、ペルシア語文化圏におけるムガル朝の位置について論じた。ムガル朝は 16~18 世紀におけるペルシア語文化圏の中心ともいべき位置にあった。ペルシア語文化圏では 15~16 世紀前半に著しいチャガタイ・トルコ語の発展が見られるが、その後、衰えて、ペルシア語文化が隆盛する要因として、特にペルシア語を好んだムガル朝の動向は無視することができないものである。

このように、南アジアにおけるペルシア語文化の重要性は周知のものとなっているが、ペルシア語文化と在地社会の関係については、不明の点が多い。従来の研究は、きわめて大ざっぱにペルシア語文化の受容について述べるのみで、時代や地域による限定がなされることが少ない。特にムガル朝が一大パトロンとして存在した時代と、その衰退によって各地の地方政権によって庇護を受けていた 18 世紀とを一緒に論じることはできない。そこで、本報告では、続いて 18 世紀のシンド地方において、ペルシア語文化がどのような形で担われていたかを、この地方のペルシア語詩人伝、『詩人達の諸論攷』(カーニウ著、1760-1 年完成)を分析するなかで明らかにした。

具体的には、アウラーグゼーブの即位(1658 年)以降の 258 名の詩人を取り上げた。このなかで、依然としてイラン系のものが 42 名、そのうち本人の出身がイランであるものが 29 名含まれていた。しかし、全体で見れば、約半数がシンド出身であると考えられる。出身階層としては、官人とウラマー/スーフィーが多く、どちらかと言えば行政と結びつく形でペルシア語文化が展開していたことがわかる。一方で、少数ながらヒンドゥーの、特に書記層が含まれており、ペルシア語文化は宗教による区分を越えていたことがわかる。ペルシア語文化を維持する装置として、マクタブとその教師であるアフンド、ムッラー

の存在が注目される。彼らはムスリム、ヒンドゥーに関わりなく、行政官を目指す人々にペルシア語を教授し、そのなかからは詩人として詩人伝に採録されるものも現れたのである。